

## 「労働と律動」に於ける日本関係の記事

淡 川 康 一

古今東西の作業歌約三〇〇歌を系統的に蒐集し、以て律動と歌とが労働に及ぼす効果を実証致し、研究した、カール・ビュヒアーの「労働と韻律」と題する特殊研究 (K. Bücher: Arbeit und Rhythmus 6. Aufl. Leipzig 1924) は、社会経済史の上から見て極めて興味深い労作であるのは勿論、近代的工場に於いて現在リズムを利用し、音楽の力を借って作業の規整、軽減、惹いては能率増進、更らには又労働者の厚生、福祉の向上等が企図せられ、又学校に於ける体育に音楽や舞踊が取り入れられている現況に見て、此の学績は吾人が当面している経済的及び社会的生活の上に、幾つかの、重要な暗示を与えているのである。而して本書の研究対象としては、東南洋の自然民族の生活がかなり多く取り入れられているが、又一方では極東の文化民族である中国、朝鮮及び本邦

の、労働に関する、古来の風習、習俗、慣例に論及されている個処も亦、少くないのである。例えば、本書の第五章に於いて、「多衆を結合する為めの作業歌の応用」(Die Anwendung des Arbeitsgesanges zum Zusammenhalten größerer Mens chennassen) と題された部分には、其の第二の引例として、次の様な記事がある、「今挙げた習慣は(筆者註一)、中国人も之れを持って居り、其の大規模な国家賦役の際に実行している。アー・コンラディー (A. Conrady) は其に就いて次に次の様な報告している、「大体労働をリズムで誘導することの価値を知っていたらしい中国人は、既に遠い昔から大狩猟、池の構築、城壁の建設、宮殿の建築を初めとする国家の賦役労働を調整する為めに、太鼓若しくは鐘鼓(而かも長さ一二尺もある特別の種類のもの、鞞

鼓)を使用していたのである。其の、最大の証拠は周礼(西紀前一二世紀の末)の中の一つの規則であろう、其に曰く、以鞀鼓鼓役使(「鞀鼓を以て賦役仕事を励ます」と。之れは狩猟賦役のみに関するものとされているか、其は誤りであつて、他の、多くの証拠が、其が繪での賦役仕事の際に応用されていることを証明しているのである。斯様な訳であつて宋書(西紀五世紀)は端的に、「綵での戦略的な企図や、賦役仕事に際しては、鞀鼓(今日の所謂夏鞀)が打たれる。」と云つて居り、又詩経の中にある処の、西紀前一二世紀末のもの、宮殿建築の際の、實際の光景を目前に彷彿とさせる、次の歌節も、此の太鼓を使用したことを示しているのである、「之を抹ること夔夔たり、之を度ぐること薨薨たり、之を築くこと鞀鞀たり、削ること屢として憑憑たり、百堵皆興り、鞀鼓勝へず。」(筆者註二)。

(筆者註一) 此の章の初めには、大要次の様な記事が掲げられている、「多数の人間が同一の行為に協力することでは、何時でも各人は各々其の掲げた目標に達すること出来るであらうが、秩序ある、釣合のとれた行動に出る必要が不可避的なものに為る。歌は此の場合に於い

「労働と律動」に於ける日本關係の記事(淡川)

て、秩序を支える力となり、又同時に元気づけたり、元気を恢復させたりする為め的手段と為る。

此のことは主たる仕事で自分の身体を或る場所から他の場所へ運ぶ必要がある場合に於いて、特に明瞭に現はれるのである。

多衆歌は労働に何か莊嚴の氣と言つた様なものを与える。戦争や狩猟に出掛けるのは、多くの自然民族にあつては祝祭行列の様なものである、其の拍節歩行は屢々殆どその儘ダンスに移り変わるのである。」(K. Bücher: Arbeit und Rhythmus. 3. Aufl. S. 234 | 35.)

(筆者註二) 「詩経」の原文と、之に対するピエヒエー氏の独訳とを掲ぐれば、夫々次の如くである、抹之夔夔、度之薨薨、築之鞀鞀、削屢憑憑、百堵皆興、鞀鼓弗勝。—— *kiü cì zing-zing, tok yü huang-huang, zük yü teng-teng, siok lün p' ing-ping, pek tic kai hing, kao-kie sing.* (K. Bücher: a. a. O. S., 245.)

又第四章の「作業歌の各種」を列叙するに当つても、其の摘歌の項に中国の茶摘み歌に言及して、次の様に紹介されて

いるのである。「茶園は多く険しい山背に設けられてゐる。それ故、茶摘は婦人や乙女に取っては実に困難な仕事である。彼女等の労働を元気づけるために浙江省では家父の一人が竹笛でメロディーを奏する、而して彼女等は知つてゐる茶摘歌。「西山に登り、聖葉を摘む」と云つた様な古歌を唱えるのである。西方の聖都拉薩には仏陀が住んでゐる、其処には不死の妙薬の聖葉も茂つてゐる、と云う様な意味である。此の歌は退屈な茶摘の仕事や西方の巡礼になぞらへてゐる。此の際、働く者は其の労働苦を忘れるのである。此の仕事は次第に急速調で進められ、婦人達は皆仕事の一定部分を済ませた後に、他のものに残され度くないのである。」(K. Büchler, a. O. S., 121—24)。此の記事は法律学生であつて、一九〇七—八年にライブチヒ (Leipzig) の合同国家科学ゼミナールの会員であつた、寧波の周玉卿氏の報告する処に係る旨の註記がある。

さて次に本書に於ける日本關係の記事であるが、其の第四章の「作歌の各種」と題された、諸外国の引例の中に、「日本のものとしては、私は日本の馬子が其の馬を連れて行進する途上で唱う歌詞を六篇手に入れている。」として、次の様に

列叙されてゐる (K. Bücher: a. a. O. S., 143—45)。「伊勢は津でも、津は伊勢でも。」「尾張名古屋は城でも。」  
 (Was ist Ise ohne Tsu, Was ist Tsu ohne Ise, Was ist Nagoya in Owari ohne sein Schloß?) (筆者註一)  
 (伊豆地方)「富士の頭がっん燃える、なじよに煙がっん燃える。三島女郎衆に、がらら打ち込み、焦がれおじやたらっん燃えた、しよんがくまーまー」(Der Gipfel des Fuji brennt. Warum brennt der Rauch? Weil man die Dirnen von Mishima alle hineingeworfen hat Wenn sie in Liebe brennenw erden, wird (der Fuji) in Flammen brennen, Shion gaye, dô dô!) (駿河地方)よんべなーー忍んだらえーーおさんどな、まじよ、唾を吐いていたから、ごよー鍋のめしやすきて、突っ臥したーーえー。 (Guten Abend, nä als ich leise hinein schlich, ne, zum Dienstmädden, schlief sie erst fest; Iyo Der Reis im Kessel war zuviel und sie schlief tief.) (遠江地方)うらが お長松の嬢は、蟬よーちあーあぜさー蟬だとおもするえ(っ)、八間真中に足だらけ、しよんがへ どーどー (Wenn ich die Frau des O Chi-

Umatsu betrachte, Takoyo! Chia azesa! sieht sie aus wie ein Tintensch. Acht Ken in der Mitte (messen) die Füße allein Shion. gae do do!) うらが性根は浜名の橋チーネー、今はたえてー、音もせぬ、チー、チー、チー、チー (Mein Charakter gleicht der Brücke des Hamana; jetzt ist sie längst abgebrochen, und kein Geräusch wird mehr vernommen, dou dou!) 高い山から谷底見れば、えー、えー、おまん可愛くや布ちらす、なー、なー、どー、どー (Wenn ich von dem hohen Berge in den Thalgrund schaue, yé-é; Wie lieblich ist Oman! Sie bleicht das Leinen, näyēē, dou dou!)、以上に掲げた歌詞は何れもライプツヒ (Leipzig) に於いて医学を修めに来た日本人・池田秀雄氏の教示されたもので、同氏の報告によって、ビュヒアー氏 (K. Bücher) の同僚教授であったコンラディー氏 (Conrady) の一門下生であるエミール・シュテンツェル氏 (Emil Stentzel) が、記録に留めて置いた旨の註記がある (K. Bücherra. a. O., S. 142—43)。

尚ほ第四章の作歌の各種を取り扱って論稿の中に、其の第

「労働と律動」に於ける日本関係の記事 (淡川)

三節に「同時拍節の労働」(Arbeiten im Gleichakt)と題して、「今までに論じて来た作業歌に於いては、慰乐的及び刺戟的要素が労働リズムに於ける。総ての接続点で明白に現はれているのに反して、同時拍節に於いては、我等は唱はれている歌の文句に全く異った役割が与えられているのを見出すのである。此の場合には、其の任務は先づ第一に総ての労働者に一定の時点で同時に同種の力を出す様に促すこと、否初めて其を可能にすることである。

此の種の場合は何れも、多数の人を要する、重い荷物を動かす仕事である。その際行はれる活動は、持ち上げたり、運んだり、押したり、引いたり、撞いたり、漕いだりすることから成り立っている。引くのにも水平に引くのと、垂直に引くのとがある。」と冒頭して、各国の実例が引用されているが、「荷物を持ち揚げたり、又は運んだりする際の歌」の中で、「日本からも亦、荷物運搬人の歌の一例があり、之は単なる、次の様な叫呼から成り立っている。ホー、ホイヨ、ホー、ホヨ、エー、コラ、サッサ!、ホー、ホー、ヨイ、ヨイ、エー、コン、サッサ。 (Hō ho! ye he hoyo yé kéra sassa! hō ho yoi yoi, ye kára sassa!)。此の歌は多数の荷物運

搬人が急ぐ場合に、合唱されるのである。単に意味のない叫呼から成り立って居り、而して各種の共働の時に歌はれる、かかる拍節歌に属して、日本人は木遣りと云う、一の、独自の名称を付して居るのであって、之は此の種の作業歌が極めて屢々現はれて居る一証拠である。」と説明をされて居る（K. Bücher: a. a. O., S. 161.）。又此の、同じ節の「船漕歌」の部類には、「日本人は漕歌（Ruderlieder）についても独得な名称を有している（船乗歌）。私は此の「船乗歌」の二つを報告することが出来る。」として、「遇田川には木の葉来流す、私や主故名を流す。ぎっちゃん！ぎっちゃん！（Auf dem Sumidafluß Laß ich Baumbätter schwimmen ; Deinetwegen Laß ich meinen guten Namen schwimmen. Gichong ! Gichong !）」「潮来出島の真孤の中に菖蒲咲くとははははははははははは（Unter der Schiffsmatte Bei tagomashima Blüht eine Schwerlilie ; Ist das nicht schendlich ?）」が、引用とれて居る（K. Bücher: a. a. O., S. 211.）。

本書は其の結論とも見る可き、第九章として掲げられた「経由的發展原則としてのリズム」(Der Rhythmus als

ökonomisches Entwicklungsprinzip) と題する論稿で終つて居るのであるが、此の冒頭には次の如く述べられて居る、「吾人の研究は其の末端が今日の世界では相互に遠く離れて居るが、其れを遠く遡って追求するに従つて相互に接近し、終には尽く一つの点に集つて居る処の、幾本かの線を明るみえ出したのである。此の一点は途無き闇黒が人類の太古史を蔽つて居る地域の限界の直ぐ傍に横はつて居るのである。而して此の交叉点から既往を今一度心眼を以て幾千年を通じて追求する時は、吾人は物的な面からは分化及び結合と見做し得、人的な面からは労働結合及び労働分割と見なし得る社会的發展行程が問題にされねばならぬことを認識するのである。」

此の交錯点に於いては、吾人は労働が尚ほ芸術及び遊戯から区別されていないのを見るのである。労働、遊戯及び芸術を自からの中に融合させて居る、唯一種類の人間の活動が、存在するのみである。人間の精神的並びに肉体的活動の、此の本源的統一性の中に、吾人は既に遊戯の重要形態及び遊戯の芸術——動く芸術並びに静止の芸術を其の胚種中に含む処の、後の経済的、技術的労働を認めるのである。而して吾人

の概念を此の状態に移さんとするならば、吾人は芸術(音楽、舞踊、作詩)は労働の遂行と共に現はれ、静止の芸術(彫刻、絵画)は労働の結果——其が単なる図案の形態に止つてゐることも珍らしくないが——具現されるものと云はなければならぬのである。然し是等のもの総てには、尚を経済的要素が欠けているのである。之は純粹な、本能的な生命活動である。」(K. Bücher: a. a. O., S. 397—98.)

此の所説に拠れば、元來本源的には同一のものであつた労働と遊戯、技術と芸術、是等が夫々相互に分離して行つたのは、漸進的發展経過の迹を辿つたとされるのである。故に当然史的考察の要が認められるのもあつて、此の場合日本の実例としては、如何なるものが引用されているかを見るに、原始的な道具技術の前提及び結果の強制的性質にとつて特徴的なものとして、同時拍節労働及び交互拍節労働の例が示されている。先づ典型的な、完全な同時的拍節の例としては、大工が角材を建築場へ運搬する処の、北斎の画を転写したものの、経済雑誌社の発行になりし「社会学叢」第一巻から引用された処の、奈良大仏寺建立の際の石材運搬の図、宝曆の著になる、我が国諸国の名産を彙集し、図畫を加えて説示した

「労働と律動」に於ける日本關係の記事(淡川)

処の「山河物図絵」中より引用した、鯨が踊りと歌の伴奏とで轆轤仕掛けの綱を使用して陸揚げされる状況、建築労働者が石を撞込む地撞の有様、北斎の畫を転写した処の、歌声を合図にする、荷車の牽引及び後押し等がある。又我が国に特に多く認められる処の交互拍節労働の例としては、奈良に於ける晒布の図が引用され、更に同時拍節と交互拍節との両程が結合されたものとして、六人の踊踏人夫が製織場で作業している処が、前に挙げた「日本山海名物図絵」中より例示されているのである。而して是等労働作業の状況が永年に亘り漸く成立した処の、確乎たる習慣的規則の存在を立証するものとして、技術的に見て余り収益的でない綱曳きの、頻繁な応用、彼の職業の記しとして其の手に采配を持つている音頭取に依る労働の指揮、交互拍節労働を除いて、総ての場合に認められる処の、拍節歌を以てする仕事誘導、背中につけた紋章による、同じ親方の配下にいる労働者の表象等の諸事項が、挙げられているのである。而して是等の資料は何れも最近京都で物故された西彦太郎氏の助力を得て入手した旨の註記がある。

本書に引用された処の、中国及び日本の、労働と律動に關

する実例が持つ意味として考う可きは、同じく氏の著作になる「国民経済進化論」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)(第二集の巻頭なる「贈与、貸与及び招請労働」(Schenkung, Leihe und Bitarbeit)と題する論稿中の、次の一節であろう。「各経済が其の必要とする時に、充分な労働力を得られないならば、隣人相集り、之に労力を給付する風習は、多くの民族の間に見られ、恐らく世界全般に亘る現象とも見做し得るであろう。露西亞人、南スラヴ人、羅閩尼人、エストランド人及び阿弗利加のパンツ人等は、何れも夫々の言葉に於いて、此の風習に属する、独自の称呼を有しているのである。之以外に、招請労働は亜細亜の、殆ど総ての部分に於いて、即ち其の西端から中国に至る迄に認められるのである」(K. Bücher: Die Entstehung der Volkswirtschaft. II. 8. Aufl. S. 16)。此の記述の中で特に日本と云う字はないが、「亜細亜の、殆ど、総ての部分に於いて」とあるのを見れば、当然此の中には本邦の場合も包含されているものと考えても、差支ないであろう。招請労働と云う様な、極めて古い、労働要求の形態、而かも同一種の仕事の爲めに多数人が同時に、同処に集結することも特色とする、此

の程のものにあつては、当然其の労働が律動的方法で実施されることになるのである。労働と律動との関係に於ける、本邦の実例が比較的多く引用されているのも、此の招請労働の考察に關聯していることを特に注意せなければならぬと思ふ。而かも田植歌に其の著例を見る如く、本邦至る処の農村に於いて、此の種の労働形態が尚を微か乍らも其の殘響を留めていることは、本書の最後に強調された、次に引用する結言と思ひ合せて、尚を一縷の光明を認めるが如き心地するのである、「此の点では個々人の生活は貧しい、無趣味なものになつていたのである。労働は彼に取つては最早や音楽であり、又同時に詩ではなくなつて来たのである。市場向きの生活は最早や彼に、自家用の爲めの生産に認め得る様な、個人的な名譽と名声とをもちたらないのである。此の市場向き生産なるものはダース物を要求し、個人的、芸術的好みを少しも認めないであろう。芸術はパンに頭を屈して了つたのである。職業的に造り上げられた活動は、朗かな遊戯でもなければ、又愉快な享樂でもなくして、真面目な義務であり、而して屢々苦痛な禁欲でもある。然し又之と合せて、是等全体が此の發展過程に於いて獲得した処のものを看過してはならぬ

のである。技術と芸術とは、分化と分業とによって従来夢想だもせなかつた処の、高度の能率にまで発達したのである。

労働は一層生産的となり、又吾人の財貨の供給は一層豊富となつて来たのである。而して技術と芸術とが何日かは、精神には幸福な清澄を、又肉体には自然民族の間の最良のものを越えしめる、調和のある完全さを取戻す、一層高い律動的な統一を括約し得るであろう処の希望を棄ててはならないのである。(K. Bücher: a. a. O., S. 421.)